

科・ぼ・せ・ん News Letter

2023.9.27 発行

<https://ridai-svc.org/>



「百見は一体験にしかず」



科学ボランティアセンター

コーディネーター 三木 淳男

「百聞は一見にしかず」の意味は「人から何度も聞くよりも一度実際に自分の目で見ると確かであり、よくわかる」ということ。英語では seeing is believing。「科学ボランティア活動って何だろう?」と思っている人は、いちど実際に見てみてほしい。もっと言うと「百見は一体験にしかず」。百回見るよりも、自分が実際にやってみればもっと深く理解できる。「科学ボランティアとは何ぞや」が体得できる。

つい最近私は「赤玉土から鉱物を取りだそう」というミニイベントを実施した。園芸用の赤玉土を浅い皿に入れ、水を少し加えて指先で押しつぶすように洗うことをくりかえすと、ざらざらした粒が残る。これを40倍ほどで拡大観察すると、キラキラした鉱物が見えて、まるで宝石。アメイジング!

こんな感動体験をお客さんといっしょにできるのが科学ボランティアの醍醐味だ。さあ、ゲームを捨てて、いっしょに科学ボランティアしようぜ!

科学ボランティアセンター 15周年記念イベント 開催!



2023年8月11日(山の日), 科ボラ発足15周年記念イベントを開催しました。参加して下さったOBOGは予想を大きく超える24人! 現役, 新旧コーディネータ合わせ参加総数は58人に上りました! OBOGのみなさんは現役時代のバイタリティそのままに, 現役との交流会のほか, 同時開催のサイピアフェスティバルにも応援に駆けつけてくれ, 会を盛り上げて下さいました。

【OBOGの感想より】

・こういうイベントに参加するのも久々だったので, 自分自身がワクワクして楽しかった。(12生)

・ボラセンがとても長い歴史の中で積み重ねられて作られたものだとわかり, すごく重みのある組織になって来たなあと感心しました。

【現役生の感想より】

・色々な卒業生の事を知ることが出来て良かったです! 一生忘れられない素敵なイベントでした! ありがとうございます!! (21生)

・OBOGが科ボラで得たことを今の仕事でどう活かしているかなど聞いてよかったです。(22生)

【高原センター長の感想より】

・OBOGが社会で活躍してくれていること, そのことに科ボラでの経験が役立っていることがわかり, やってきた甲斐がありました!

科ボラのなつやすみ～イベント盛りだくさん

科ボラ
Twitter(X)
見てね!



8/6 岡山理科大学で学ぶ自然教室



磯の生き物 ウミホタル実験
魚の耳石探し 貝殻標本作り

8/6 北ふれあい児童科学館 科学あそび

手回し発電機で遊ぼう
工作:紙コップ逆さまカメラ



8/7 児島民主会館 夏休み子ども科学実験教室



音で遊ぼう、工作:コケコココー、
蛇つかい、ストローロケット

8/8 横井小学校学童保育朝日クラブ

もしも空気が見えたなら
[工作] 分子模型作り



8/9 倉敷環境学習センター 大学生が教えるわくわく実験

ドライアイスで遊ぼう



8/20 西大寺ふれあいセンター科学あそび

水の表面



8/24 津島小学校学童保育みどりクラブ

飛ばして遊ぼう



9/12 つしま幼稚園 かがくあそび

ふわふわしてあそぼう
紙コップロケットづくり



た〜くさんの中の一部の紹介でした!

学生スタッフ会 OB/OG 紹介



松本 (旧姓: 児玉) 朱里

(おじょー)

ピープルソフトウェア株式会社 勤務
(倉敷市)

岡山理科大学 工学部 情報工学科
(2017 年度卒業)
科ボラ在籍 2014-2016

** 近況・仕事内容 **

大学卒業後、今の会社に入社し6年目になります。最近は主にスマホアプリの改訂業務に携わっております。昨年度はプロジェクトリーダーを任されるなど責任のある立場になってきましたが、心強い先輩や上司のサポートにより楽しく仕事をしております。現在は2人目を出産したばかりなので育休中です。2歳と0歳のハードな2児育児に奮闘しております。

そしてありがたいことに科ボラReturns(科ボラOBOG公式LINE)の運営にも関わらせてもらっています。そんなふうこれからも私の得意な分野で科ボラに貢献出来たら嬉しいです。

** 科ボラの思い出 **

数え切れない程あります。科学ボランティア活動、それまでの準備、会場までの道中、イベント後の帰り道。全てが楽しい思い出です。

その中でも「おじょー」という同期につけてもらったあだ名は大変気に入っており、その名を呼ばれるといつでもあの頃に戻れる気がします。このあだ名は子どもにも大人にもすぐに覚えてもらえやすいあだ名のように、みんなに親しみをもって呼んでもらえるのがとても嬉しかったです。

現役時代にはこんな出来事もありました。私は水道局担当だった事もあり、イベントで司会をさせてもらいました。そして後日別のイベントに参加していると保護者の方から「水道局のイベントで司会されていたくおじょーですか?」と声をかけられました。ちょっとした有名人になった気分です笑 でもそんなふう誰かの思い出に関わる事ができるのも科ボラ活動の素敵な部分だなと思います。

** 役に立っていること **

大学入学時、私は人前で話すのが苦手でした。その苦手を克服できたのは科学ボランティア活動のおかげです。また社会人として1番重要なスキルであるコミュニケーション力が鍛えられたのも科学ボランティア活動です。コミュニケーションといってもただ人と話すというスキルだけではなく、コーディネーターの先生方や科学教室などの講師の方、イベントの担当の方などの同世代ではない大人と関わる経験というのも科ボラならではの貴重な経験だと思います。その経験が社会人になってからベテランの先輩や上司の方とのコミュニケーションに役に立っていると思います。

** 後輩へのメッセージ **

私は毎週科学ボランティア活動をしていただこの活動が楽しくて仕方ありませんでした。皆さんにはそのような楽しめることはありますか?熱中できることはありますか?もしあるならそれにとことん時間を費やしてください。一生懸命取り組んだ経験はきっとあなたの糧になります。就活でもネタにできます。またやりたいことは声に出してみてください。行動に移してみてください。うまくいかなくても何かしらあなたにとって良いことが得られると思います。現役時代、卒業研究の内容を決めかねていた時にたまたま岡崎先生とお話する機会があり、せっかくなので科ボラの経験を生かして「教育×情報技術」というテーマでやりたいと話していたら「ぴつたりの講演会があるよ」と教員向けの講演会をご紹介いただきました。そのように声に出すことや行動に移すことで生まれる縁もあると思います。

岡山に住んでいることもあり今後はイベントにお客さんとして参加することがあると思います。その際は気軽にお声がけください。というかこちらから話しかけると思うのでよろしく願います笑

[写真は学生時代👉]



::: 科ボラ 2023 モンゴル訪問 報告 :::



さわ

理学部応用物理学科3年

特技 ピアノ

モンゴルに行きたいという不純な
動機で科ボラに参加
写真はモンゴル・セレンゲ川にて

9月6日から、私を含め学生スタッフ会から5人がモンゴルへ渡った。チンギスハーン国際空港は首都ウランバートルの郊外にあり、草原の中に着地するという感じであった。“モンゴル”を楽しみにしている者にとって最高の景色での出迎えであった。

9月7日、一緒に科学イベントを行うモンゴル国立教育大学を訪れた。翌8日にウランバートルから北に300kmほど離れたセレンゲという県の中・高校で行うイベントの打ち合わせ確認を行うためだ。同大学には我々と同様の科学クラブがある。まず、我々の参加するイベントから観光まで面倒を見てくださっているガンバートル先生を訪ねた。ガンバートル先生はスケジュールを聞き限り殺人的なのだが、いつも笑顔で人から頼られる余裕をみせるすごい人だ。その日も我々に校内を案内し、研究の展示や授業の様子を紹介して下さった上、夜にはウランバートルにある大学からセレンゲまで同大学の学生を乗せて車を運転していた。

8日、セレンゲに到着し、イベントを行う第四学校に向かった。学校はきれいな二階建ての建物で、プログラミングにも力を入れているらしくPCルームもあった。教育について語り合う日本とモンゴルの教員には傍からも熱を帯びた連帯感を感じた。

授業中に女子生徒たちに質問できたので将来の夢を聞くと、プログラマーや弁護士、医師など“しっかりした”回答が返ってきたのが印象に残っている。

そうしてイベントの時間までもてなされるがままになってしまい、いざ始まるとなると準備不足でバタバタした。今回セレンゲには「ころりん」「偏光板万華鏡」「バンジーチャイム」を持って行った。

私は「ころりん」「バンジーチャイム」の実験を説明を担当していた。私が英語で説明すると、モンゴル国立教育大学の学生がモンゴル語で解説を入れてくれた。事前にお願していたわけではないので、生徒たちに分かりやすく伝えようという学生の意欲に頭が上らない。

イベント終了後、校長先生やモンゴル教育大の方々と一緒に近くのゲルキャンプに向かった。ゲルの中で小さな机を囲み、強いお酒で乾杯し、歌い、外で見上げた満点の星空の夜がとても心に残っている。

ラクダに乗ってテンションの上がる

私(左)と赤澤先輩(右)



翌日セレンゲを観光したのちウランバートルに戻った我々は日本の教育を取り入れた新モンゴル学園で日本の先生が行うCLIL(内容言語統合型学習)の補助をしたり、素晴らしい設備を持つモンゴニ学園の見学をしたりした。もちろん合間には定番の観光地を訪れてはお土産を買い、写真を撮った。書きたいことが多すぎて載せきれないが、とにかくすばらしい10日間だった。17日に帰国したとき私の心は少し広く豊かに変化していた。

今回の旅ではモンゴルの教育者たち(とその卵たち)の熱意と優しさに助けられた。日本語教育をしているウランバートルのナラン学校での「もしも空気ができたなら」の授業でも、専門的なところは理科の先生がモンゴル語で解説を入れてくださったり、モンゴル教育大附属小学校で行った「ころりん」でも日本語学生や英語のできる学生が通訳を快く引き受けてくれたりした。そして実験に参加してくれた生徒たちが素直に耳を傾けてくれたことにも感謝したい。我々の英語や日本語を聞こうとし、感情を表現し、実験について考えてくれた人が多かった。どうしても言語の壁を感じ、理解しているのかわからないとネガティブな思いになっても、活き活きとした顔を見るとやる気が湧いた。「笑顔は共通言語」とはよく言ったものだ。言葉の壁はなんとかなるのだから、この駄文を読んでモンゴルで科学ボランティアをしたいと思う人がいれば、どうぞ恐れることなく参加してほしいと思う。

モンゴル国立教育大学附属学校

にて行った「ころりん」の風景

